

不便の者、心底や 父の仇を深く思ひ詰て 仕官の身に成ては 願

望なるべからずとこそ思ふらめ 是非に不便よと 一家相談して

三浦の介 御前へ出 申上るは 河津が子供 天然と粗忽の若者共

にて 御前の近習など仕る者ならずと申上 打捨て沙汰もなかりし

爰に 京次郎は 如何□ 斯様の□□ 曾我兄弟は世に可出と思ふ

故 此事の□□ながら 此比は頻りにたより 身は位よりとかや云

て 度々 曾我に來り 入魂にする 此故に 十郎は貞□□□ 小

次郎の思ひ誤りて 兼々の心底を物語り 一所に本意を可達と語る

思ひの外の事や 小次郎大きに驚き 以外の不届き ひとへに人

畜の沙汰也

付記

資料の閲覧、翻刻に際して御高配を賜りました宮崎県立図書館に、厚く御礼申し上げます。

〔平成九年十一月二十九日受理〕

伊東入道が孫 河津三郎が子也とて 不便に思召て 京小次郎信俊
と名乗 出頭して 山城の国の内にて領知を給りて 今時めきたる
軀といふ共 元來臆病 世の佞謀利欲の男故に 曾我兄弟は見やり
もせず 只 折々 母の音信計也 然る所 或時 鎌倉殿の御前の
御物語に 故河津三郎祐泰が子共は如何 成長もしつるやと 三浦
介義澄に尋給ふ 三浦介御受申は 兩人共 十八歳 十六歳に成候
兄十郎は 曾我太郎祐信養子に成て候と申上る □に 頼朝公仰に
は 兄十郎 祐信養子 家督なれば 頼而近習内にや申付□ 五郎
は 北条時政が烏帽子子に成 時宗と名乗と聞 成長もする上は
河津が遺跡をも可遣也 諸親類共之内より 何とて願も不仕哉と
被仰 故に 土肥二郎 三浦介も如何とは思へ共 難有旨を申上
工藤も同じく申 京小次郎聞て すはや 風並能成たりとて 俄
に 私弟共の義也 取持も可仕と 曾我の里に來り 朝夕に念比に
したりけり 此節 三浦の介義澄が宿所に曾我兄弟を呼寄て 斯様
くの次第也 一段の首尾也 我等土肥と御願申上し 出て奉仕し
給へと 念比に之申 時に 十郎申は 五郎と某兩人被召出 忝人
父河津が遺跡を給らば 一家の美風 身に余り難有候 然共 主恩
を受て候 万端一身の願を止て 身を□に持し□ 難成□□奉仕す
べき也 我々は聊之願望候へ共 只兩人は其俣に浪人の身こそ本意
に候へと申 其時 五郎進み出て 弓矢神も照覽あれ □□少しの
御扶助に□□□み中心底にあらず 兄十郎□無之上は 残□も無之
候 今日有て 明日を知らず 凡 兄弟が当前の欲に愛で、奉仕し
いつ迄の命を保たん 武門の心 鉄石が如く 諸親類の合力も 曾
而望申さず 只 今日の飢うる迄と存詰て 今日よ明日よと 只一
口に申切て 曾我の里に帰りけり 扱も不便の兄弟心底也 土肥
三浦は此旨を聞て かねて彼等が心底を知るゆへに 感涙を流して

郎は早く取成さればとも 虎御前は長に御座すぞ 御身の敵は虎

御前よ 身のくづ折るゝも知給はず 誠の敵こそと 余所の事の様

に云なす 十郎も心付 団三郎を遣し 長の館を窺へば 工藤は早

道を改めて帰ると申来る 南無三宝 取逃したり 己 何国迄と

弓矢搔負 兄弟打連て 諸鎧を合て追懸る 今四五町にして見れば

工藤は真中にあり 侍五十騎 前後に打開んで 北条殿の息 江間

小四郎と打連て 雑兵百余人召連 一屯に成て行過る 兄弟 馬を

一所に乗寄て 扱 果報目出度工藤かな 仮初の遊びにも連たり

打たせたり 然ども 大勢の雑兵は風前の塵 恐るるに足らず 北

条殿の息 江間殿に何之意恨もなきに 可討様もなし 又 大勢と

渡り合せん内には 工藤は急で逃失ん 天命也 よしや 待て 暫

し 遅きか早きか 兄弟が太刀先に有ものと 齒噛みをなして

大磯に引返す また 長が館に入て 憂さを晴らし居たりけり 工

藤祐経は此時の有様を伝聞て 兄弟が付狙ふ□ 扱もうるさき次第

なりと 是より 大磯通ひはふつと止 只 兄弟を可討との工夫よ

り外なかりけり

京小次郎信俊が事

爰に 京小次郎信俊といふ者有 彼は 曾我兄弟とは同胤別腹の

兄也 是は 先年 河津三郎上洛之時分 洛中にて 下威腹に□□

□子あり 打捨て 関東に帰り 重而上洛之時は □□□に成たり

始而 父子の対面はしたりけり 雖然 其生付確か□□にして 武

士に仕立て 我子にすべき者に非ずとて 京家の公家の侍 藤原武

部大輔基晴といふ 近衛殿の伺候の侍にとらせたり 然る所に

平家乱のとき 我一類は関東に在とて逃下り 鎌倉殿に奉願 幸

音楽之方に通達 別而 京家の次第を能知たり 此故に 頼朝公□

家•にありて 長•が方•を相•窺•ふ 虎•に出•会•て盃•し 酒•宴•せんと言•ふ
 当時•切り人•の工•藤•祐•経•なり 金•銀•は所•望•也 諸•人•もてはやし 取•持•
 て 虎•御•前•に 出•会•給•はんやと相•尋•る 虎•御•前• 是•を聞•、 俄•に胸•
 轟•き さて嬉•し哉 此•日•比 窺•に遅•かりしこと、悦•で 工•藤•殿•なら
 ば、 対•面•すべ•きに 長•が館•に入•らせ給•へと 俄•に工•藤•は江•間•殿•と同•
 道•にて長•が館•に來•り 虎•御•前•を待• 虎•は追•付•可•出•と言•へども 終•に
 出•ず、 其•内•に 十•郎•の方•へ文•認•めて 此•事•を知•す 工•藤•は留•置•けり
 早•く來•り給•へと 五•郎•方•へも申•送•る 時•宗• 忝•人•走•付•討•んとは思•へ
 共 兄•弟 堅•く装•束•して 両•人•揃•ふて可•討•との事•故•に 急•ぎ 團•三•郎
 を使•として 曾•我•に申•送•る 十•郎•は取•物•も取•あへず 馬•に白•□•はま
 せて 即•時•に大•磯•に來•る 此•節 虎•は座•敷•に出•んと思•ひしが いや
 く 工•藤•は夫•の覗•ふ敵•なり 仮•初•にも対•座•すべ•きにあらず 古•語
 にも 梨•下•に冠•を正•さず 瓜•田•に沓•を改•ずとや 仮•令• 我心•正•直•に

ても 遠•目•には盜•とや言•わん 十•郎•殿•への不•実•可•成•とて 曾•而•座•敷•
 へ出•でず 追•付•計•と申 此•ゆ•へに 工•藤•も心•付•けん 又 待•遠•にや
 有•けん 江•間•四•郎•を同•道•して 道•をかへて帰•りける 抑 虎•が心•も
 貞•実•也 梨•の下•にて冠•を直•さば 脇•目•には 手•の上•る見•ば 梨•をち
 ぎ•ると見•るべし 瓜•畑•にて沓•の紐•を直•すに俯•かば 瓜•をとると見•る
 べし 然•らば 人•間•の常•に万•端•に心•を付•べし 仮•令• 不•義•の心•なく
 とも 敵•の工•藤•と一座•したらんには 曾•我•が心• ひがむまじき物•に
 もあらず 又 よしや今日•討•ずとも 忝•度•來•らば また重•ねても可•
 來 月•日•が永•しと 虎•は此•場•を能•泳•たり 去•程•に 五•郎•は十•郎•を待•
 兼•て 馬•の湯•洗•して鞍•置 髪•は四•方•に押•乱•し 松•の木•を見•る如•き手
 足•に成 弓•矢•たばさみ 息•卷•して待•けり 然•る所•に 十•郎•は走•る馬
 に諸•鎧•を合せ 一•散•に馳•來•り 五•郎•を見•て いか•にや時•宗• 敵•は長
 にあるやと 大•音•にて匂•りたり 大•勢•の人•の聞•処 近•比•氣•之•毒 五

や左様有まじ。夕勘当して 今朝許す事や有 五郎め 未だ汝が部

屋に居は打殺べき也 急ぎ追出せ さもなくば 十郎まで討殺す

べきと ひしめかる、 十郎は案に相違して 立帰り 五郎に此事

を言ふて 又 今更歎く内に 一時計り之内 三度まで使来り 急

ぎ五郎を追出せとの事也 十郎大きに難儀して とやかくと思案の

内に 此比 此子細に依て大磯にも案内せざるゆへ いかなること

もや有と 虎御前より人の来るに 十郎心付 是幸也 虎御前に頼

まんと 文認め 我等 明日可参 五郎事は斯様の次第也 能様に

労はりを頼入との事也 此故に 五郎は馬に打乗て 団三郎を召供

して 大磯の里にぞ行にける 虎御前は女儀とはいへ共 心の激敷

人にて □□□敷 五郎を受取 御兄弟にても 同宿に可住は心掛

りとて 粧坂の長の家人の有ける方に預け 能に勞りしゆへ 五郎

は粧坂に日を送る 粧坂の少将といふ女は 書籍には不見 此家の

娘などに有つるや 不審也 五郎は 団三郎と下僕式人 馬宅正

装束着て 幽成躰とはいへ共 また不自由にも非ず 此雑用は人に

も知らせず 虎御前の賄也 げにや 世になき十郎 斯程まで虎が

信用 当代とは違ひて 昔は人の心も直にて 殊勝に有つ 不思議

の虎御前也

工藤左衛門 大磯に来る 兄弟追懸る事

工藤左衛門祐経は 鎌倉中の諸大名 皆大磯に徘徊するといへど

も 曾我十郎 毎日立廻ると聞て 足長に出兼 用心する 然ども

金銀に□さるはなし 我虎御前をだまし 十郎を可討ものと 江

間小四郎を誘ひて同道するは 北条殿の息なれば 曾我兄弟に出会

ても 敵対する事有まじきとの事也 其日に限りて 十郎は曾我の

老母の勞わりにて 来らず 此節を工藤知つらめ 大磯の宿中之別

しや濡^ぬれても 曾我の里は近^{ちか}し 可立帰と 雨にしはたれて すこ
 く帰^{かへ}り給ふを 老母 表に出^いでて是を見て 曾我殿^{そがどの}を雨宿りに入
 申せ 十郎殿を呼入よと 頻りに人を出して呼入 馬は下家に繋置
 と 十郎殿を奥の座敷に招受して休息させ 少饗応して 十郎殿は
 幼年にして父上に離^{はな}れ給ふと聞 御いたわしく候得^えば 心安立入給^い
 へ 尼公も由緒有^{もの}者也 疎略にも仕らじと 酒なんど強^しゐて 娘に
 も会^あひ給へと 虎御前を呼出して近付にして 是は鎌倉の諸大名に
 もたまさかに出る独り娘なりけれ共 曾我殿の御もてなしに出し
 候と こんくの馳走にて 其夜もこゝに 虎御前の居間に止宿し
 て夜を明し 老母も虎も又なき念比 宿執の縁ならめ 大磯の宿中
 に捨果たる貧乏曾我なれ共 虎御前第一の奔走にて 毎日く虎が
 部屋へ来り 心を慰^{なぐさ}め 牢人のせめて鬱^{ふさ}気を散^ちぜらるゝ 月日を重
 ね 夫婦の語らひ浅からず 工藤左衛門を覘^{のぞ}ふ之子細 虎御前は別

て心^{こころ}にかけ 辛勞也 此□□は万事を止て 虎御前は人交りもせず
 して 工藤を引寄^{ひきよ}て 討^うたすべきとの実也 万端 十郎之身の上も
 虎の賄^{まかな}ひに致されけり
 五郎追出され 粧坂に行 虎御前の介抱^{けいほう}に与^よる事
 斯て 月日も過 翌年 十郎は十八歳の時 五郎時宗元服の事に
 付 母の勘氣を受 其夜は十郎の宿所に明したり 翌朝に至り 十
 郎は老母の前に出^いで、 五郎事 我家に候へども 一旦若氣の至り
 也 何れ御子之ことに候へば 僧に成ても俗になりても 御勞^{ごらう}はり
 は同然なり また参り候はゞ 異見を加へ 又得心も仕らむ 只一
 旦の御呵り 私におゐて迷惑 唯武人の兄弟なり 御勘氣御免之事
 奉願に 私の部屋に歎^{なげ}き居申との詫言也 老母は大□□□を損^こじ
 いか^いに十郎 女の事也とて侮^{あなづ}るこそ奇怪なれ 河津殿^{とつどの}ならば よも

養父曾我殿の給りたる 宿月毛の馬の いつ乱髪したるも知れず。

湯洗ひしたる事もなきは 其身の隙なる様にも 片時も心底に隙

なき故 汚れたる水浅黄の大紋に 千鳥染たるを着て 毎日く

大磯小磯之宿中に佇みて 賃なければ 人並に□屋へ入て酒吞事な

く 又 自然に立入たる方へ 三度に忝度も酒の札をも云はざれば

貧乏神の如くに云立られ 広き宿中に嫌がらる、 貧乏神の銭なし

の曾我殿よと 異名を付て笑へども 年若き人なれ共 元来 恋路

の好色の心少しもなく 何頓着なく毎日来て 人の軒下 爰にては

呵られ かしこは笑はれ くる日もく 人を詠て立休ろふ 外目

には 十郎殿は恋路が有て来らるゝか 爰は遊の商売□にて 金銀

なくては不叶事 一門衆に願ふて 金貰ひて来れよと 恥を与ゆれ

共 構わずして 只打笑ひ 扱も工藤に会わざるこそ残念なれ 常

に□事ゆへ 虎御前も老母も 十郎とは能見知れり 或時 長の老

母 鎌倉方の人に尋しは 曾我十郎殿は 養父がかりにや よき器

量の若き人なるが 何とて一門中の介抱もなきことやと尋る 往昔

も世話役あり いやく 曾我十郎殿は一類中之合力も受られず

わづか貧乏神成り 父河津殿、敵 工藤左衛門殿を可討と 及□□

願にて 此里へも立入らるゝ 夫故 日参也 恋も無常もある人に

あらず 世の中の哀といふは曾我殿也と 言ふ 虎御前は是を聞

痛わしき若殿原の心底や 憂き浪人の上にまた 身に願有 いたわ

しや 母人よ 相いたわりて参らせん 明日をも知らず 十郎殿や

と 詞の端に心ありげに聞へける程に 老母も心付 折もこそあれ

と打過けり 或時 俄に大夕立 俄雨夥敷 車軸を流す 諸人家々

に走り込み 十郎も瘦せ馬引て あなたの軒に立寄ば 曾我殿の馬

立にはあらず 急ぎ退き給へと言ふ かなたの軒に立寄れば 貧乏

神の雨宿り 盗みつこそと押出す 何方に雨を凌べき所もなし よ

家敷も栄たり 往古は長は地頭半分^ノ之如く重かりき 此長ははや死
して 独り娘虎御前とて美女有 老母のいとおしみ深く 成長に随
ひ 其姿□からず 絵書 花むすび 詩歌 筐結 壺つとして暗か
らず 三十二相^ニの美女にして 其節 日の本之美女と呼ばれ 心ざま
も一際勝れて 実や 世の中の□入にて 諸大名は不及申 賤しき
も 賤の男迄 恋慕^トはざるはなし 然ども 白拍子といふに非ず
此虎御前は長の亭主也 諸大名の参会にも 長が家に入御之時は
是非に及ばず 御□□御相手に出るゆへに 大磯の賑ひは 此虎御
前に始れり ゆへに 名も高し すべて世の中の人 心ならぬを慕
ふ世の中にて 初夜の月を悦び慕ひ 花は散りて跡 青葉□を慕ふ
何事も只 人心 恋路も叶はず 目に見る事もたまさかなるをこそ
心に込て慕ふ習ひ也 此故に 諸大名 諸士 若殿原 貴賤の隔て
なく 大勢大磯の宿に入込んで 首尾を見合 長が家に入り来り

虎が盃いたし□んと願へども 十度に壺度もなりがたく 今の□□
□こそ(□□ 今のまつかふ也) 宿中の繁栄とはなりにけり 尤
なるかな 此虎御前は 俗性賤からぬ人也 一年 伏見大納言藤原
「実」基朝臣 武藏国に流され給ふ時に この大磯の宿に泊り給ふ
其仮御宿^{ヤド}りの落胤也 父は正敷公卿也 此故に 残し置れたる書跡
も有 天然に其筋あり 唯気高き女臈^{ナカ}にて 十七歳に成給ふ 然れ
ば 是曾て 遊女にて人のもて遊びにてはあらざる也 十郎と深く
夫婦になられたる子細あり 抑 一念大願之有人 斯様^{カサマ}の遊所へは
立寄まじき事といふは 世の中に常に言ふ事也 雖然 此儀には訳
も有 十郎十七歳之春より 大磯と曾我は程近く 並びの里也 毎
日大磯に入来り 昼夜とも徘徊するは 鎌倉の諸大名遊びに来るゆ
へ 工藤も来るべし 能首尾あらば 年来之宿意を晴らさんとの下
心也 然る上は 衣類の見苦しきも構わず 馬の労るゝも厭わす

を可討計略也 虎御前は 十郎を連理の契りに成して 此已後は諸

大名の酌にも曾て出でざりけり 斯様の馴染ゆへに 五郎時宗事

頻りに老母の追立ゆへ 是非に及ばず 十郎才覚して 大磯へ差越

して 虎介抱にて 粧坂に忍て月日を送り 折々は 曾我の里に忍

て来る 辛勞なる身の上也

京の小次郎といふ者有 是は 曾我の里にて 兄 同胤別腹の兄

弟也 此故に 敵可討事を語れり 小次郎驚き差留 其上 母に談

ず 老母驚き 十郎に異見申すれ 此事を五郎に語り 此小二郎

臆病 又 他言もやすべき 十郎と五郎憤りし事を聞て 小次郎は

京都へ逃登る時に 王藤に此事を知らせたり 天晴 小次郎が心底

は畜類の沙汰也 左衛門 いよく用心稠敷 覚悟しけり

頼朝 天下を忝手に握 大果報の人にして 天下の人民 久々

平家の逆政に苦しみたる其跡ゆへに仍り よく日本の法会を正し

武家の制法を定め 〇辺順〇なりしかば 全ら延喜の時代に立帰り

在鎌倉の諸人皆 本国を離れて勤番する 此繁昌に連て 相州小田

原に白拍子集りて 往来の諸人 遊興する 此故 京都白川の如く

此地は人にすぐれて繁昌の地には 遊女なくては不叶事也 鎌倉時

代の格を以 関東にも吉原を御免有 又 古来 京都にも有 近来

大坂にも有 是皆 鎌倉始りにて 手本也 法度法令稠敷ても賑ふ

に 況や 諸大名 諸士 町人百姓入込て 大磯小磯 并 粧坂

是江戸吉原の衣紋坂同事也 今の三ヶ之津の遊女地より 大に繁昌なる事也 江戸吉

原〇町 〇安殿 対馬守 御老中皆 元和年中の跡の遊女地に 御

高札をいたされて 御免之地也 尾州知多郡砂村より此吉原に出たり

大磯虎御前之事

大磯之宿賑ひける内に 宿長 今の名主并 代官なり 是は往古よりの名にて

感通するゆへならん 五郎は 夢に母の勘氣を許さるゝと見て 大

に悦び 起上り 如何に 十郎殿 只今 母上勘氣御免にて候 召

れける いざ参らん いざさせ給へと 起こしたり 十郎起上がり

それいかに 我等武人伏して 何とて左様可有 我窺見ん まだ夜

も鶴鳴渡る 何とて左様可有哉と言ふ 五郎 いや／＼ 誠の勘当

にあらず 不便の五郎やと 紫染に小蝶を染たる小袖を下着にせよ

と給はりたり 十郎殿も浅黄の小袖を貰われたり 是見給へと 二

つの小袖を取り出だしたり 打着せありければ 扱難有母上の御心

かな 是は寒からんと 着せて帰り給ふらめ 押しつけて参らば

又 母上の御機嫌悪しからん 明日にも 能に詫言可申 とかく

我方に忍ばれよと 穩便にする内に 追立の使来り 是非なく 此

所を追出さるゝ事になりたり

曾我根元評判大全 卷之六

本章

吹風も鎌倉やうの□□しく 今此代の静謐なり 天下が一度平家

の逆政につ□ また □乱の苦しみを去り 万民樂しみを諷ふ 当

時鎌倉の繁昌 関は州奥□は不申 日本国中 諸大名集り 錦を鏑

り粧ひ也 此繁盛につれ 相州大磯小磯の宿に 白拍子 遊女数を

尽して 常々 花車風流 勿論 普段は軒を並べて 華やかに大門

小門立 粧坂の中より町格子を別つ 鎌倉殿より免許ゆへに 諸大

名迄 日夜行集ひ 酒宴する 是は 古今往来同じ姿也 爰に 大

磯の長が娘虎御前とて 和国随一の美女あり 此虎御前は 白拍子

遊女のうちに非ず 長が独り娘にて 亭主也 諸大名の参会之節

唯御酌に出る計り也 然る処に 十郎祐成 去年夏の比 此所に来

り 不慮に 長が尼公の情に与り 日々此所に徘徊する 偏に工藤

落とすな 五郎よ 時宗よと 力を添へて泣給ふ 五郎は祐成に寄り添ふて 今のはや 母上は勘当せらるゝ 父上は工藤に討たるゝ 月にも星にも 十郎殿計り也 有甲斐もなき五郎が身の上や 兎角一時もはやく思ひ立 本懷を遂げ給へと言ふ 左にて有 汝は我より年若にて 何の訳も知るまじ 工藤左衛門は大名にて 侍ども三百 常に勤番す 道行く内も 五十百人を召連 兩人が力にては 不叶 何とぞ首尾も時節も可有やと 四方山の物語りして 五郎はうつむきて 十郎が膝を枕にして眠りたり 十郎は 時宗が背中の上に額を付けて 兄弟打たり 泣寝入りたり 扱も 年もゆかざる 兄弟の 兄は十八才 五郎は十六歳 扱も不便の有様也 老母は五郎を追出して 如何仕つらんと 只独り さし足して 十郎が部屋を差覗き見給へば 燈の陰に 兄弟只式人 寢所にも入らず 直垂をも不脱して 重り伏して眠りたり 母は見る目も心くれ 扱も

不便の有様也 今日勘当する母が心を知らざるこそ尤なれ 法師にならで男に成姿を見て 河津殿の面影に 扱も似たり 力量大に秀れたると聞 扱も目出度 嬉しや 河津殿の敵 祐経を討つべき者は五郎也と 心の内はいか計り嬉しきぞや 然ども 曾我殿の恩を得て 十郎は曾我の家を継 是他家なり 河津殿の由縁とては 全く五郎忝人也 我勘当して 十郎まで不通せば 五郎忝人の覚悟にて工藤を討ちて 諸親類の見継なく 母の勘氣を受けて 忝人の働にて 親の敵を討てとの母勘当也 流石に恩愛のはかなさよ 只ひとへに勘当を苦しむ 不便の者めや 夜寒に嘸や寒からんと 急ぎ立帰り 母の召されたる小袖二つ取来り 兄弟に打着せて 障子の外へぬき足して帰り給ふ 是 親の子を思ふ道 流石に 土肥二郎が娘也 勘当なく工藤を討たる時は 兄弟が祖父也 土肥殿の後見也と 言わざる人の有「べ」きや 誠に 信実夢にも見へつ 心に

は言へども 又 左迄かつくの暮にも非ず 馬壺正づ、に乗たれば 武門の一族なり 親の身としては色々の心も有と宣ひて しばらく落涙ありて 扱 十郎よ 伝聞こそは恨みなれ 先 曾我殿、申付給ふ 五郎が出家すべきの処 如何なれば男にはなし給ふ 大方 和殿が所為なるべし 抑 父河津殿之過給ひてより 曾我殿深切 海山高恩は 定て知給ふらん 今に至りて 河津殿の後室と別家を立て かつこふ有 兄弟の子共を養子として 十郎は嫡子に立河津殿へ深く朋友の交りの信義を残さる、 此曾我殿の差図にて 五郎は出家せよと也 仮令 母が男になれと云とても 太郎殿の法師になれと申さる詞を 水にすべき様や有 又 十郎が唆すとも男になりたる箱主めこそ憎けれ 三郎殿に離る、母の親を侮り 如此ならん よしや親を知らざる無道人 如何 我子なるべき 如何に曾我殿の子たるべき 向後 我を母とな思ふな 我も子とは思わ

ず 十郎も 母を親と思わ 五郎を追い出せ 烏帽子を着せ給ふ 北条殿を親にせよ 下女 中間迄心得よ 箱主は勘当也 僧侶に成たらば □□□してくれよ そこを去れくと 荒らく追立 奥の間に入給ふ 不便なるかな 兄弟は 只式人打連て 十郎が部屋に立入りて 只茫然と涙にくれて 実や 母の仰も去事也 出家ならば 母勘気も許さるべきとは思へ共 今日男に成 北条殿、手前もあり また 兼て 兄弟の念願もあり あら憂難儀の身の上や よしや生害して 河津殿に会わんや いやく 生涯の母上に託んや いやく 疾く馳入りて 工藤を可討や とやせん かくや 父上に離る、因果の五郎かなと 声を上て泣叫ぶ 十郎も五郎も寄り添いて 母の勘気は 兼て彼様に可有と知處也 親の身なれば 唯当分の事なるべきぞ 心を落し給ふなよ 何し 兄弟が五歳三歳より思ひ詰たる一念の 親の敵を捨置きて 出家すべき様やある 心を

人橋をかけ 如斯とぞ申送ける 曾我太郎も老母も大に驚き 何方
 にや行けん 出家が嫌ならば 何とて曾我には来らずや 何方へや
 行けん 悲しみ給ふうちに 十郎殿も見へずと言ふ 又 是に騒
 ぎて 太郎も驚き夥し 土肥 三浦に人を走らし 四領の宇佐美
 久津美 河津 伊東迄俄に人を走らし 手分をして相尋る事 隠れ
 あらずして 他家他門之面々 □々聞伝へく 面々人を出だして
 箱根山を探し求む 此ゆへに 箱王丸は出家を嫌がり 箱根山を逃
 れ出でたりと知らざる人もなく 曾我の里の騒ぎ 詞にも不及 然
 る所に 十郎は五郎を同道にて 鬼王 団三郎を召供して 北条殿
 の引出物 送りの人に取持せ 兄弟馬に乗連て 曾我の里に來りけ
 れ □ 朝より尋兼たる者共 女中まじくら悦んで 箱王殿御入也
 十郎殿も御歸り也と立騒ぐ 面々 箱王丸を見て驚き いつの間に
 かは男に成り給ふと 今一入の驚き あき果てたる計り也 母は

此由聞給ひて あら不思議や 男に成りたるとは 定て法師に成り
 たるならんと 待侘て広敷迄行て見給へば 箱王丸は兄十郎より一
 倍增り 角前髪を立て 烏帽子折着て 北条より給はりたるかちん
 の大紋を衣紋清らかに着なして 太刀差しこなしたる有様 父河津
 三郎に似たり 唯其俣 取違る程也 老母一目見て 今一入の涙を
 おし隠して奥に入 十郎よ 箱王をいざなひ 此方へ來り給へと
 頼りにの給ふゆへ 見て 我 □ 悪しかれば 怒りもや 又悦もや
 と 入兼て居給ひけり 世に書残せしは 只此所に直に勘当あると
 云残したれ共 左様にあらず 何とて 下賤の如くに 左様可有や
 勘当有にも是非を正して可有事なり 流石に 土肥実平の娘也 達
 而母公の呼び給ふゆへ 十郎 五郎同道にて 奥の間に入 座し給
 ふ 老母見給ひ 天晴 河津殿は大果報の人也 兄弟共に勇猛の子
 を持給ふ 母の身として いか悦ばざらんや 勿論 窄人兄弟と

き者に候ゆへ 朝夕の語らひにも仕度候 勿論□□ 又 曾我太郎

母も制し候へども 是非に男に可仕と存詰て候 然て 土肥次郎殿

にも 三浦介殿にも 烏帽子親に頼可申候へども 存念も候得て

召連候 御運にもあやり候様候へ 又 北条殿の烏帽子着せ給は

り候はゞ 老母が立腹も少かるべし また 箱王は力量も候へば

北条殿烏帽子にても 武勇無下にも候まじ 覚も□偏に奉頼と申け

り 北条思ひ給ふは 此兄弟が父河津三郎は別て入魂也 又 此若

者は無駄に強勢の 大力量のと聞及たり 何様にも 北条が烏帽子

着せても恥づかしからず 彼等兩人若是にして我を頼こそ殊勝なれ

畠山重忠も 彼等兄弟は勞わり候に 我辞退せば 土肥 三浦 畠

山争ひすらん □□すべし 其時は残念なるべしと 十郎に向ひて

悦入て候得□ 父河津に能も似給ふものかな 急ぎ元服の用意可申

と 北条の大広間に 東の方を向けて 小桜緘し之鎧一領飾り 弓

矢 箆を取揃へ 赤銅作りの太刀一振 庭前に連錢葦毛の馬沓正

鞍置にして引立させ 急ぎ□□にて 時政 烏帽子取上て 果報も

運も時政にあやり給へと 三方に土器 兄弟に注し給ふ 曾我五

郎時宗と名乗す後 直垂料を給わり 一日留て 饗応酒宴して 日

も暮方になるゆへ 十郎 五郎同道して 鬼王 団三郎を召具して

悦勇て 曾我の里に帰りける也

五郎時宗 勘氣を蒙る事

去程に 九月六日の朝に 箱根の別当は 箱王丸受戒の用意相調

て 時刻も移る 早疾く／＼と頻りに召すに 箱王丸は居ざりけり

こは不思議と四方を尋るに 寺院隅々 山々谷々 一山残らず尋さ

せらるといへども見得ざりけり 別当大に慌て騒ぎ 是はいかに

不思議千万と 諸方に手分して相尋るに知れざるゆへ 曾我の里へ

貴殿の運もめでたく 本懷を達する祝儀也 世になし人の浪人の元

服こそ哀なれと 日陰者の如く云れんも口惜きことなり 何とすべ

き 土肥次郎殿に参り 烏帽子親にや頼ん 三浦殿にや参らんと思

案するに 夜もはや東雲も明渡る 鬼王は当廿歳に成若者なれば

流石は小仲太が子程あり 若殿達は異な事を申給ふものかな とし

ては浪人 かくしては日陰者、如く仰られるは心得ず 当時 鎌倉

殿より伊東殿への御咎も相済んで 御兄弟には御構ひなし 又 曾

我太郎殿も 小身といへども 鎌倉殿の近習たり 其養子として

何に憚り□可有や 土肥殿 三浦殿も 烏帽子親に否とも申まじ

なれども 当時 北条殿こそ鎌倉殿の舅にて 出頭第一の切り人也

兼て 伊東 北条は並の□等也 河津殿と北条殿 入魂の交り也

遠親類也 北条殿を頼み給へ 烏帽子親北条殿ならば 工藤も心置

て返り討もすまじき也 又 鎌倉中の徘徊も心安く 諸大名も心置

なし 第一は 曾我殿咎も有まじ 母上も 北条殿に免じて 始終

は良かるべしとて 急がせ給へ 日のはや差出と 十郎 箱王を同

道して 供人鬼王 団三郎只式人にて 九月六日 北条殿へぞ参ら

れける

世の中の世語にも □□□のとて 無駄に貧窮者に書たれども

左様にもあらず 鎌倉の諸大名も 諸か侮る人もなし 然りといへ

ども 思ふ子細ありて 心にかゝる月日を過るゆへに 態と身を退

き給へるなり 此時に北条殿 曾我兄弟に対面 珍し哉 十郎殿

扱 人となり 実や 河津殿は我別而旧友也 今会ふ心地ぞとする

と 念比に悦る、 十郎申は 弟箱王丸事 母人の出家に可仕と箱

根山に登せて 彼別当坊にて 只日夜学問は仕らず 朝夕殺生を好

み 獵人の如く放逸に振舞候ゆへ 箱根山を追出され候に付 其身

も男に成可申と 一向に申候 又 十郎事も御覧の如く 陰身のな

らる、曾我太郎よりも箱王が出家得道のよろこび。明日 十郎
 同道して可参旨被申送 委く相調たり 別当阿闍梨大によるこび給
 ひて 箱根一山に触流し 祝詞の用意夥し 餅酒を並べ 非時 齋
 の用意 別当坊は時ならず賑ひ 既に九月六日之日取にこそ極れり
 去程に 其夜 箱王は団三郎を近付て 既に明朝 出家すべきことや
 仮令 母の仰に順ひ出家受戒するとも 敵工藤が事を思わ 一念
 の称名も心にそまず 読誦勤行は偏に修羅の太鼓ならん 曾而 ま
 た登山のとき 兄十郎殿と申約したる言葉もあり 旁以 夜中に曾
 我へ逃帰り 十郎殿に対面して 可然すべきぞと 夜中箱根を逃げ
 出て その夜の明方に曾我の里に來り 十郎が屋形に案内す 此十
 郎屋形は母の家より差構 別家を作り居給ふに おそやといふは
 母の家と書て母屋と呼□ふ 是は 十郎宅より老母の館を母家とも
 申たる故也 既に夜明の事なれ共 兼て十郎は心に思ふ事有 兼て

箱王が出家の時は逃來れと教置けるに 既に明朝受戒とや 不思議
 千万 今に不來と 燈火をそむけて只壺人居給ふ 時に箱王來りて
 案内す 十郎欽て まづ相互に竹葉吞て物語する 時は寅の時也
 兄弟と四人額を合せて相談す 箱王丸言ふは 兼て申通り 父の仇
 工藤は討たずんば止むべからず 扱も 明朝 出家すべきとのこと
 頻り也 依之 逃亡 兼而 兄弟成長を待ち 夜も明けば 山く
 定て可相尋 仮令道を急ぎ□□ 五里六里の道なれば 急には來る
 まじ されども 油断して取戻されては 先非を悔ても甲斐なし
 早々 いかにも頭を括り付て 烏帽子着て男に可成ぞや 十郎殿は
 如何思召哉と申けり 祐成は 兼て思ひ設たる事なり いつか御辺
 に烏帽子着せて見むと思ひしぞや 母上仰の坊 曾我殿怒りは十郎
 に任せ給へ みな当分のことなるべし 然ども 氣の毒あり 流石
 に御身も河津殿の子也 我は 養父曾我殿の烏帽子着せられたり

約あり かたぐ差俯ひて 其座は立たり 既に見知られたり 去

程に 右大将家御下向に付 大勢の中に打交り 工藤も鎌倉へ帰り

けり 箱王丸は一問に入 誠に 工藤めに引出物貰わん事 口惜事

なり 敵に對面して 討たて逃したる残念さ 然りといへ共 見覺

て心易しと 急ぎ団三郎を曾我の里にさし越して 斯様くの次第

を申通して 重てこそ参着 沙汰を聞ば案内可申条 来り給へ □

□贈りて 此後は 工藤に貰いたる小刀こそ天命なれ 我一世の内

討すまして 此短刀にて最期の止めを刺すべきなりと 大丈夫思ひ

込んだる一念こそ恐しけれ 終に 此短刀にて止めは刺にけり 此

已後は 箱王丸大に心逸れて 曾而学問はせざりけり

箱王丸出家の沙汰 并 曾我の里に逃帰る事

箱王丸は十三歳にて工藤左衛門に對面してより以来は 益 口惜

き事に思ひ込んで 日夜旦暮 親の敵を討んことを思ひ 学問は不

通に嫌らひて 経読習ひたるも 只又の菩提迄にして 夢々出家望

みにあらず 又 箱根権現に日に七度の参詣は ひとへに 仇工

藤を討し給へとの立願也 其帰るさは 今年十九歳に成団三郎を相

手として 谷嶺の石を倒し 木の根を返し 力量を溜めて 手足は

松の木如く 次第に筋太く逞しく成 偏に仁王の如く成行に随ひて

父河津三郎の面影に 扱も似たる若者かな 曾我の里より弓を取寄

て 山路深く入て 遠矢を射る 然も弓勢強く手練也 出家の下作

とは見へざりけり 別当阿闍梨大に驚き 母の心に違ひ 養父曾我

殿の咎も如何なりとて 出家可為致とて異見を変へ 又 曾我の里

に申送らるゝ 出家の事 母も大に欽び 亡父河津殿の菩提にも可

成 一子出家すれば 七世の父母出離生死の大菩提 あら難有や

明日受戒を奉頼と 念頃に用意 袈裟 衣 又は衣服まで取揃て送

く存る 尋給はんや と言へり 祐経は事に慣れたるしれものにて
 いかにも と言ふて すつと立て 同宿を召出し 別当の坊に申し
 給へ 工藤左衛門申達する条々 当山に 河津三郎が二男ありと聞
 く 一家の誼に有て候 対面仕度 と申入たり 別当坊心得て 箱
 王丸に僧を付けて出されける 他の兄大勢集り 箱王丸は能親類を
 持たれ 美日なる事やと 大きに羨めり 箱王丸は是非なく 工藤
 前に□□を隠して 口惜き事は胸に満ちたり 祐経は箱王丸に向て
 貴殿は河津の子息にや 扱も 三郎に能似たり 当山御座を夢にも
 知らず 音信も申さず 舎兄一万はいかに致されたるや と相尋る
 大勢の中也 是非申さず 曾我の里にと申ける之とき 祐経 さて
 いたはしや 祐経は同姓にて候条 已来は親共思ひ給へ 曾我の里
 へ通ひ給ふ時は 祐経が方へ寄り給へ 河津殿になり代り 夢く
 疎略不可申 浪々の身は苦しきものと聞 我等方よりも見継可申

工藤を後盾に持たる兄は天晴 当山にても 肩こそ広からめ 舎兄
 十郎へも 此事よきに申給へ 兄弟とも 已来工藤が方へ立入給へ
 当山の人にも 工藤が親しき孤にて候へば 不便を加へて可給 工
 藤が一家の別れ也と 殊之外念比に言ふも 彼が心底を和らげん為
 なり 此時 長物語の様なれ共聞給へ 御身の父河津は 八幡三郎
 が討たりとや 其節 我は在京にて 少其節を知らず 残念 当代
 本領は工藤拝領なれば 公務を給ひ 兄十郎にも一庄を分け参らせ
 ん 相構へて悪敷心得給ふなど 脛に疵ある言訳 箱王丸眼目力量
 勝れたるを恐れたるなり 此已後に祐経言ふは 一家始ての対面
 引出物なくては叶ふまじ と脇差に差したる小刀の赤木の柄金作り
 を抜いて 箱王丸にやりたりける 流石大勢の中なり 十三歳の子
 供なり 兎角の返答一言もなく 己 一太刀とは思へ共 いやく
 仕損じては末代迄の恥也 又 兄十郎も一所に本懐を達すべきとの

と評定して 箱根の御山を忍び出で 曾我郷に逃帰り 十郎 夜中

に工夫をして 鬼王が申条に依て 翌朝 北条殿の宅に伺候して

箱王丸元服□□を頼む 時政評定ありて 烏帽子を着せ 曾我五郎

時宗と名乗 馬壺正 鞍置 鎧一領 太刀一振を給わり 夜に入り

曾我の里に帰る 曾我の里には大に驚きて 今□ 箱根 師の坊よ

り 諸方を尋求る 老母は怒り常ならず 河津殿居給は 斯様に

はあらじ 五郎めこそ憎けれ 勘当なり 立□れと 大に怒り給へ

り 五郎 男になりての悦び 行当り 一間に入て 十郎と物語 愁

傷す 追立の使来りぬ といへども 今晚は十郎が方に止宿せり

流石に恩愛のかなしき 二人の寝姿を覗き見て 母は大に悲しみ給

ふ 唯物の哀は 親と子の間也

光陰は矢の如く 建久元年九月に成たり 箱王は十六才 団三郎

は十九才なり 光陰は矢の如くといふ世俗の詞なり 弓にて射る矢

にあらず 凡 年月の内 一年十二月 四季を分けて 日夜長短有

日の永きは六十一刻 夜三十九刻 又 秋になり 夜長く 毎月

上旬 中旬 下旬によつて違ひあり 割とぞ字を書 割とは 例へ

ば水者を器物に入 其水 日夜に減るほどの穴を空けて 一昼夜盡

く減しまふ 其中に棒を一本立て 刻を百付て 昼の内 何十刻減

るを考へて 昼夜割り付る也 此中の棒を年の矢といふなり ひた

と移り替りの速さを矢といへり 時計も時の太鼓も みな根元は年

の矢にて知る 唐の時計也 光陰は矢の如しとは此事なり

箱王丸 祐経と対面之事

仁田四郎忠常は箱王が力量に驚き 又 河津三郎に能似たるゆへ

工藤左衛門に向て言ふ 誠や 当山に河津が子息有と聞く 貴殿は

親しき一類なれば 知り給ふらむ 我も 三郎祐泰□ことは懐かし

翻刻『曾我根元評判大全』

卷之五、卷之六

後藤 多津子

凡 例

本文は底本通りに翻刻することを主眼としたが、読解の便をはかって次の処置を施した。

- 1 句読点に相当するところは一字あきとした。
- 2 仮名は現行の字体に統一した。
- 3 片仮名「ハ」「ミ」「ニ」は捨仮名の場合を除いて平仮名扱いとした。
- 4 仮名の清濁については、底本にない濁点を適宜補い、補った文字の右に・を付した。
- 5 漢字は通行字体を用いたが、慣用字は底本のままとした。
- 6 反復記号は底本のままとした。
- 7 明白な誤り及びわかりにくい宛て字は適宜改め、底本の文字を振り仮名の位置に残した。
- 8 底本に振り仮名がある場合は、その振り仮名にハ・Vを付して7と区別した。
- 9 脱字は「」内に補った。
- 10 損傷等により判読不能の部分は、字数のわかる場合には字数分の□で、字数のわからない場合には□で示した。

翻 刻

曾我根元評判大全 卷之五

本章

箱王丸 工藤左衛門に対面し 赤木の柄□小刀を貰ふ 此儀残□

□ 終に跡に工藤祐経が止めを刺したり かくて 年月を過行に

曾我箱王丸は拔群に力量 形ち珍らかに 亡父河津三郎の御影の如

く 只日夜に 父の仇工藤を可討との工夫 行迹 曾而出家の所為

にあらず 此故に 師匠行実阿闍梨に老母の通して 出家受戒すべ

きに相極り 日取 明日に定まりけり 此□ 箱王は密かに団三郎